

2024年度神戸大学文学部公開講座「人文学を解き放つII」

< 講義概要 >

10月5日(土) 13:40~15:10 白鳥 義彦 教授

日本の大学を解き放てるか—歴史のおよび日仏比較の視点から

中世ヨーロッパに生まれた大学は、聖なる権力としての教会と、俗なる権力としての王権や国家との関係の中で、時にそうした権力に近づき、また時に距離を保ちながら、自らの存在を探ってきました。普遍的な制度としての「大学」という視点とともに、それぞれの国の大学はそれぞれ独自の展開を遂げてきたと見ることもできます。

日本に大学という制度が移入されたのは明治期以降のことですが、およそ一世紀半を経た今日においても、当時に端を発する歴史的な経緯は日本の大学のあり方の根本を規定し続けています。とりわけ、私学の比重が高いことや、国と大学との関係性などは日本に特徴的な点です。

日本とフランスは、中央集権的な国であること、英語が主とされる現今のグローバルな学問の状況のなかで「周縁的」な位置にあること、日本は明治維新後、フランスは普仏戦争の敗北後の19世紀後半という同時期に高等教育改革が行われたこと等、いくつかの共通点を見出すことができます。一方、ソルボンヌは最初期に創立された大学の一つに数えられることや、それ以降の歴史的な動向をはじめ、両国の間には相違点も見出されます。

本講義では、歴史的な視点を踏まえつつ、フランスを参照点としながら、日本の大学について考察を行い、日本の大学とはどのような存在であるのか、日本の大学を「解き放つ」ことは可能であるのかを考えてみたいと思います。

10月5日(土) 15:20~16:50 有澤 知世 講師

和本のデザインから考える江戸時代の文芸

堅い内容の本は箱入りのハードカバーで、柔らかい内容の本は文庫版でソフトカバー。表紙のデザインも、堅い内容であればシンプルで、柔らかいものはポップなイラストなど。こういった視覚情報によって、私たちは書物の中身をイメージできる。

歴史的にみても、和本(明治以前に日本でつくられた書物)は、内容とデザインとが密接にかかわっている。

日本の書物の形状で最も古いものは、卷子本(かんすぼん)である。卷子本はその形態上、右から左へと少しずつ紙を開き、綴じるときには逆に巻き取ってゆくという鑑賞形態であるため、不便な点があった。そのため後に、開きたい箇所を自在に開くことができ、携帯にも便利な冊子本が登場する。しかし古態である卷子本は、格式が高く神秘的な形態とされ、古典的な物語や和歌といった、貴族的性格をもつ文学を綴る際や、儀式的な性格を持つ書物を作成する際に用いられ続けた。

冊子本においては、大きさや書型の違い、表紙デザインの在り方によって、内容の性格をあらわした。特に、木版多色摺の技術が発達した18世紀末~19世紀初頭の娯楽本の表紙は、古い書物風のデザインや異国風のデザインを積極的に取り入れ、華やかな見た目で購買意欲をそそるとともに、作者や時代の嗜好を表現した。

和本は、それぞれの書物の社会的位相や内容的性格をマテリアル全体で示したり、デザインに工夫を凝らして楽しんだりしていたといえ、情報伝達以外の要素も重要であった。実際の和本をご紹介しながら、デザインと中身の関連付けについて、日本における創意工夫の伝統についてお話ししたい。

10月12日(土) 13:30~15:00 伊藤 隆郎 准教授

デジタル人文学とアラブ史研究

近年進展著しいデジタル人文学との連携により、私の専門である中世アラブ史の研究にも新たな可能性が広がりつつあります。

デジタル人文学(デジタルヒューマニティーズ、人文情報学)とは、ある研究者の言葉を借りれば、「人文学に情報学の技法や技術を応用する学問」と定義されます。デジタル人文学から人文学研究が特に大きい影響を受けているのは、データの記録保存、分析、可視化の3つの点においてです。中世アラブ史研究でも同様です。

データの記録保存という点では、アラビア語文献の多くがデジタルテキスト化され、共有されるようになってきました。また最近、フランス国立図書館やトルコの多くの図書館のように、所蔵する手稿本(写本)の画像を公開するところも増えてきました。今世紀の初めまでは、目当ての文献が日本で手に入らずに困ったことがよくありましたが、まさに隔世の感があります。

データ分析の点では、大量のデジタルテキストをコンピュータプログラムを用いて解析することなどが試みられています。

データの可視化の点では、さまざまなツールが提供されており、人間関係などのネットワークを簡単に表示できるようになりました。そして、それがまた新しい発見につながったりしています。

この講義では、中世アラブ史の分野で行われているこれらの新研究を紹介し、今後の展望と課題についてお話ししたいと思います。人文学研究の新たな魅力の一端をお伝えできれば幸いです。

10月12日(土) 15:10~16:40 野田 麻美 講師

伝播するイメージの変容—日本近世初期の絵画制作における版本利用について

本講座は、日本近世初期に流行した画題のなかから、中国の版本の図柄を用いた「帝鑑図」に注目し、中国の拓本を絵画化して近世に流行した「輞川図」・「蘭亭曲水図」の作例と比較することで、中国から伝わった図像イメージが版本や拓本を通じて豊かなイメージを生み出したことを考察する。

「帝鑑図」は、中国古代から宋代までの歴代皇帝の事蹟について、逸話一つ一つに挿絵及び解説を加えた明代の版本・『帝鑑図説』を基にした絵画である。日本では、豊臣秀頼が翻刻したとされる慶長版の刊行(1606)後、さまざまな帝鑑図が制作された。その際、版本にない図柄を用いたり、新たな画題を生み出したりといった試みがなされ、当時の絵画様式の発展を促した。

一方、「輞川図」は、唐代の詩人・画家である王維が営んだ輞川荘を自らが描いたという故事に基づく主題で、中国や日本など東アジアでは盛んに描かれた画題となった。「蘭亭曲水図」は、東晋の書家・王羲之が蘭亭に文士41人を集めて修禊を行った故事を描く主題で、日本では「輞川図」よりも人気の画題となり、江戸時代に数多くの傑作が生み出された。両画題はそれぞれ拓本を通じてそのイメージが普及したが、「帝鑑図」と異なり、江戸時代に多様な表現が展開した。

本講座では、以上の事例に具体的に触れることで、中国の版本や拓本の図様を用いつつ、さまざまな作品を生み出した近世絵画の魅力を明らかにする。